

181106
自然再生セミナー

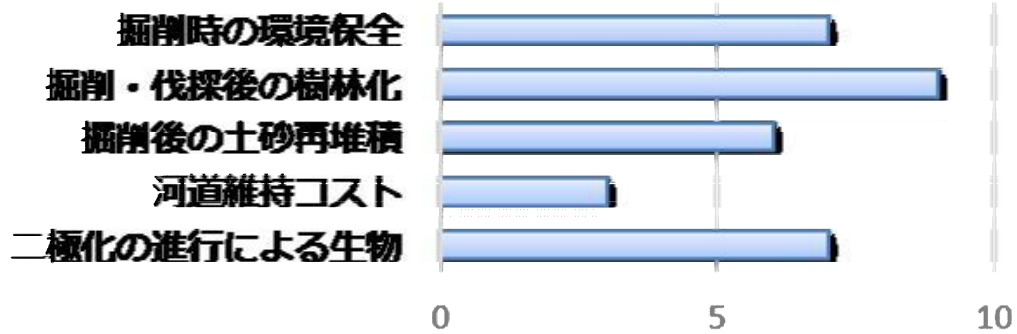
冒頭説明

(国研) 土木研究所
水環境研究グループ長
萱場祐一

本セミナーの背景と主旨

- 河道掘削は河川整備計画の治水整備メニューとして多くの河川で位置付けられている。
- 河道掘削は河道を改変するため一時的に環境への影響が懸念される。
- しかし、河道内の陸地部分の地盤高を下げるため、湿地、ワンド・たまりの再生・創出に寄与する可能性が高い。
- 一方で、再堆積・樹林化の可能性が高く、河道を維持できるかどうかは課題

河川基本技術会議における過去の論点



【河川基本技術会議】

- ・直轄各河川の課題、次期5年間の今後の改修事業や環境整備、維持管理の方向性等について検討、確認を行う場
- ・メンバーは本省河川計画課、河川環境課、保全企画室、治水課 国総研、土研
- ・現状把握を踏まえた今後の方向性、課題（1～5つ）等について地整事務所が説明、会議メンバーから助言を得る

(H26.10～H27.8会議開催分、23河川を対象)

本セミナーにおける3つの視点

現状の理解

水域・陸域環境の全国的な現状を知りたい！
特に、掘削の主対象となる河道内氾濫原の状況はどうなっている？



予測・評価・緩和

陸域の良好な場所を見分け、
掘削の影響を評価、影響を軽減したい！



計画・設計

再堆積・樹林化抑制・環境の再生・創出といった視点から
河道断面をどう設定すべきかを知りたい！

* 本日樹林化抑制の内容は扱っておりません。

本日のラインアップ

<事例紹介>

- 吉田川における**再堆積抑制**のための斜め掘削の試行
- 信濃川における**湿地創出と持続的な河道管理**のための河道掘削

<研究紹介>

- 水国魚類データに基づく水域環境の良否判定 (現状の理解)
— 氾濫原環境 (ワンド・たまり等) の現状を含めて —
- 掘削段階での環境配慮プロセス (予測・評価)
— 群落情報に基づく地図化と保全すべきエリア設定 —
- 河道掘削による氾濫原環境再生の可能性 (計画・設計: 環境の創出)
— イシガイ類を指標とした河道掘削時の環境再生 —
- 自然堤防帯河道での高水敷掘削後の土砂堆積 (計画・設計: 再堆積)
— 流域特性にまで踏み込んだ特性の把握 —